高等学校古典文法指導法の改善に関する一つの試み（その 3）
―『万葉集』における「こそ」の用例と「係り結び」の成立を中心に―

A study on the improvement of the teaching method of classical Japanese grammar in high school（Part 3）: Focusing on the establishment of *Kakarimusubi*（Kind of concordance）through examination all examples of *Koso*（One of particles）in *Manyoshu*

谷　口　政　巳
Masami TANIGUCHI

要約

高等学校の古典文法指導において「係り結び」は避けて通れない。しかし、現実には特異な終止法として丸暗記を強要したり、文法は誰かが規則を作って使われているかのような誤解を与えたりしている現状がある。

本稿では、古典文法がいかに楽しく奥深いものかを指導することができる方法の一つとして、また、フランス人がフランス語の美しさを誇りに思い、それを守り育てているように、生徒たちが日本語の素晴らしさに気づき、それを主体的に守り育てていく態度を形成するための方法の一つとして、「係り結び」の起源を明らかにすることをテーマに論述した。

特に、「係り結び」の中でも異論の多い係助詞「こそ」について、『万葉集』の全用例を検討しつつ、「こそ…已然形」の起源が終助詞「こそ」の転移によって起きたものであることを明らかにすることができたものと考える。

キーワード：係り結び「こそ…已然形」の成立、係助詞と終助詞、高校古典文法指導法

はじめに

高等学校で古典を教えていたころ、古典文法における係り結びの由来と係助詞の有効性について次のように説明していた。

（古文）草むらに　虫の声　す。

（英文）Insects　are　singing　in　the　grass.

「それぞれ疑問文に直しなさい。」というと、英文なら簡単に直せるのに、古文は直せない。そこで、「『これは本です。』を疑問文にするにはどうしたらいいですか。」とヒントを出すと、ようやく「『か』を付ける。」という答えが返ってくる。

そこで次のように展開していく。「か」は連体形接続だから、「す」を連体形「する」に活用させて、

草むらに　虫の声　するか。…… A

ということで決着する。古文として見かけない表現ではあるが、十分意味は理解されよう。も

ちろん、この話はこれで終わらない。文末の「か」を移動させると、

草むらにか　虫の声　する。…… B

これなら古文でもよく見かける表現である。何のことはない。「か…連体形」という係り結びそのものなのだ。しかも、「か」の位置は、

草むらに　虫の声か　する。…… C

のように別の位置に移動させることもできる。A は「草むらで虫が鳴いているのかな？」と文全体を疑問文にしているが、B は「虫が鳴いているが、あれは草むらで鳴いているのかな？」と、「か」が下接した部分だけに疑問の位置が移動し、同様に C は「草むらで何か聞こえるが、あれは虫の鳴き声なのかな？」ということになる。

これを英語の疑問文で表現するとなると、Be 動詞の位置を移動させるだけではすまず、文全体を一から作り直す必要に迫られることになろう。古典文法における係り結びの、いや係助詞のもっとも素晴らしいところである。生徒たちも目から鱗の思いで集中する。

これは、疑問文だけでなく、強調文であっても全く同様のことが言える。

草むらに　虫の声　するぞ。…… A

草むらにぞ　虫の声　する。…… B

草むらに　虫の声ぞ　する。…… C

生徒にも分かりやすく、日本語の素晴らしさについても理解させられる方法だと悦に入っていたが、昭和 63 年、大野晋氏の『日本語の文法【古典編】』[1] を読んで青くなった。「係り結び」の起源を筆者とは異なった説明で行っていたからである。

悔しくも　満ちぬる潮か　住吉の　岸の浦回ゆ　行かましものを（万葉集 7-1144）

を例に、「悔しくも　満ちぬる潮か」の「潮か」を強調するとき、倒置法が用いられ、「潮か満ちぬる」という表現が生まれた。「ぬる」は名詞を修飾するための連体形であり、倒置によって「潮か」が前にくると、「か…連体形」という「係り結び」になるというわけである。

筆者の説明では、独立語でもない助詞が文中を自由に移動できることになり、学校文法の体系からはみ出した指導ということになろう。大学に籍を移し、研究の時間もとれるようになり、これまで「高等学校古典文法指導法の改善に関する一つの試み」というテーマで、品詞の派生と構文の関係を樹形型で示し、活用形の意味に焦点を当てた指導法の有効性を提言したり、前田本『日本書紀』を用いて、未然形のもつ推量と打消しという相反する陳述性がアクセントで分別されていた可能性を実証的に調べ、未然形活用語尾の音読上の指導法などを提言してきた。

今回は、「係り結び」に関して特に異論の多い「こそ」に焦点を当て、『万葉集』全用例を検討することを通じて、改めて「係り結び」の有効な指導法について提言したい。

なお、文中で用いた『万葉集』の用例については、歌の末尾に（巻－歌番号）のみを示し、『万葉集』以外の用例については出典を示した。

1　「係り結び」の原理に関する研究の概観

いうまでもなく、「係り結び」研究の嚆矢は、江戸時代の国学者、本居宣長である。中世のテニヲハ研究書である『手爾葉大概抄』[2] に記された「古曽(こそ)者、兄計世手祢(えけせてね)之通音、…曽(そ)者、宇(う)

具須津奴之通音」などを書写する中で、「係り」のテニヲハとそれに呼応する「結び」の活用形を相関的な法則として捉え、『てにをは紐鏡』[3] に一覧表で示した。もとより活用形の研究が未成熟であったため、結びの活用形の名こそ用いていないが、文中に「ぞ・の・や・何」がきた場合には文末を連体形で結び、「こそ」がきた場合は已然形で結ぶということであり、「は・も」や「徒（助詞がない）」の場合は今でいう終止形で結ぶということまで示していた。この研究はその後、狭義の「係り結び」である連体形と已然形で結ぶ特殊構文についての研究と、広義の「係り結び」である普通の終止形で結ぶものを含めた研究や、直接文末の述語に係っていく「係助詞」そのものの研究へと引き継がれることとなった。

江戸後期の国学者、萩原広道は、『弖爾乎波係辞弁』[4] で係助詞に相当する「弖爾乎波」を「係辞」と名付けるとともに、こうした呼応現象を「係結」と名付けた。また、宣長の「の」「何」を「係辞」から外し、新たに「か」を加えることによってより正確なものに近づけたが、宣長同様に「係り」と「結び」の形態的な関係にとどまっていた。

ところが、山田文法で知られる山田孝雄は、『日本文法論』[5] で「係辞」を「係助詞」と改め、「係り結び」を次のように規定している。

> さて係結びの法則とは従来往々「ぞ」「なむ」「や」「か」が係となる時に述語は連体形を以て終止し、「こそ」が係となる時は已然形を以て終止すとせる現象をいふとせり。されどこれは係結の中にても特別の現象にして本居翁のいへる如く「は」「も」に対して普通の終止形を以て終止するも亦係結なり。抑も係とは述語の上にありてその陳述の力に関与する義にして結とは係の影響をうけて陳述をして終止するをいふなり。そのかくの如く普通の終止形にて終止するをも係結と称する処は、実にこれらの助詞が陳述の勢力に大なる影響を及ぼすを以てなり。

長い引用となったが、山田文法の核心は「陳述」という概念にある。文を文にしているものはその内面にある思想であり、思想により個々の概念を統一判定する作用があってこそ成り立つもので、それを担うのが用言の陳述作用なのだという。したがって、「係り」が陳述に関与し、その影響を受けて「結び」が一定の陳述をとるという「係り結び」は、山田にとって単なる形態上の呼応関係ではなく、文を成立させるための核心的な現象と捉えられることになった。

しかし、「係り結び」には「結びの流れ」という現象がある。重文のときに起きやすい連用修飾句で結ばれる場合や、複文のときに起きやすい連体修飾句で結ばれる場合は、係るべき述語が特定の活用形をとらず、係助詞が文の統一判定作用に関わらない場合が説明できなくなる。係助詞が文の統一判定作用に関わらない場合があることを説明する方法は二つしかない。一つは、係り結びや結びの流れを文以下の問題として説明し直す方法であり、もう一つは、係り結び自体を文の成立とは切り離す方法である。前者の立場が森重敏氏や川端善明氏であり、後者の立場が舩城俊太郎氏である。

森重敏氏は、『日本文法の諸問題』[6] の中で、係り結びを「文における文節・語という要素間における相互関係」と規定し、文中における文節相互の関係の中で生起し、断続していくものであって、「論理」を含みつつそれを超えた「情意」、「文法」を含みつつそれを超えた「文体」の領域で把握されるべきものと捉えたのである。しかし、山田孝雄のような厳格な捉え方を緩

めると、必然的に係助詞の境界を曖昧にすることになり、様々な間投助詞が係助詞の範疇に入ってくることにつながる。

舩城俊太郎氏は、『かかりむすび考』[7] において、係り結びを法則として捉えず、文体的な表現上の呼応と捉えるところから出発した。しかし、古代の係り結びが現代語の間投助詞と終助詞の類の呼応現象に再生されていると述べるなど、森重氏の立場とかなり重なってきている。

もう一つ別の視点もある。山田健三氏は、「係り結び・再考」[8] において、係助詞の影響によって文末が曲調終止するという従来の一般的な理解を反転させ、述部の活用形に対応して係助詞が出現するという理解が妥当であり、したがって係り結びは存在しなかったとまで結論付けている。

2　係り結びの起源に関する研究の概観

幕末の国学者、谷千生は、『言葉能組立』[9] の中で「転置」によって係り結びは起こったと説明している。すなわち、

① 舟が水に流さるるぞ。

② 舟が水に流さるるか。

の「ぞ」や「か」が「居処を転置」した結果であると述べている。古文に主格の「が」は用いられないため用例が拙いばかりか、「なむ」や「こそ」が「転置」される元の形については何の説明もないが、係り結びの起源論としては私の理解に近く、極めて興味深い。

次いで金沢庄三郎も『日本文法論』[10] の中で、「顛倒」「倒置」によって起こったとし、次のように説明している。

しぬびなば　我袖用て　隠さんを　焼けつゝかあらん　着ずでましけり

などを例にあげ、

かく下に来べき疑問の弖爾波を、其疑問の意を強く表はさんがため、順序を顛倒して上に持ち来りたるもの、やがてや、かの係となれるなり。

こその掛も亦倒置より出でしものにして、ぞと同じく連体法にて結ぶを古体なりとすべきが如し。

と述べている。「しぬびなば」の用例については、

人見ずは　我が袖もちて　隠さむを　焼けつつかあらむ　着ずて来にけり（3-269）

のことかと思われるが、現在は一般的にこのように訓読されている。起源論としては谷と同様であるが、「こそ」の結びが連体形になるのは已然形が未成熟な形容詞に限られた現象であり、連体終止法を「古体」と一括するところには大きな疑問が残る。また、仮にそうであったならば、「や」「か」と同様に、「こそ…連体形」という係り結びになっていたに違いない。

昭和に入り、石田春昭氏は、「コソケレ形式の本義」[11] の中で、

天翔り　あり通ひつつ　見らめども　人こそ知らね　松は知るらむ（2-145）

などを例にあげ、「こそ」は已然形と呼応して逆接前提条件を形成するのが本義であり、それが

明日香川　七瀬の淀に　住む鳥も　心あれこそ　波立たざらめ（7-1366）

のように、条件を強調した上で単純な已然形終止の用法として用いられ、係り結びへと発展し

たものだと説明している。しかし、「人こそ知らね」は、既に「こそ…已然形」の形ができてしまっており、その上で「心あれこそ　波立たざらめ」の場合は、「心こそあれ」が顛倒した形で順接前提条件に変わっており、文末まで已然形となっている説明がなされていない。

大野晋氏は、『係結びの研究』[12] の中で、文末用法（すなわち終助詞としての機能）のある「ぞ」「なむ」「や」「か」については、

悔しくも　満ちぬる潮か　住吉の　岸の浦回ゆ　行かましものを（7-1144）

のように、強調表現として「潮か」を前に出す倒置法が用いられた結果、「潮か満ちぬる」という係り結びが生じたものと説明している。すなわち、助詞「か」のみが「転置」や「倒置」したのではなく、「潮か」という文節ごと倒置したものが起源だと述べている。

ところが、文末用法のない「こそ」については、石田氏の説を補強し、

天つたふ　入日さしぬれ　丈夫と　思へる我も　しきたへの　衣の袖は　とほりてぬれぬ（2-135）

を例に、古く已然形だけで順接確定条件を表わす語法があり、そこに「入日」を強調するために「こそ」を挿入した結果、「入日こそさしぬれ」という係り結びが生じたものと説明した。

しかし、三つの疑問が残る。一つ目の疑問は、助詞は自立語に付属しなければ意味をなしえないという文節論の呪縛にとりつかれているのではないかということである。

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。（徒然草 137 段）

の例で考えてみると、副助詞「のみ」は、付属語であるにもかかわらず自立しており、

花は盛りに、
月は隈なきを　→　のみ、見るものかは。

のように、「花は盛りに」は文節の垣根を越えて付属語の「のみ」に直接係っている。こうした例は、副助詞のみならず係助詞でも、

花は盛りに、月は隈なきをこそ、見るものかな。

花は盛りに、
月は隈なきを　→　こそ、見るものかな。

のように用いることができる。自立性の高い副助詞や係助詞はもちろん、体言や用言に固定される格助詞や接続助詞でさえ、

夏は夜、
秋は夕べ　→　と、何思ひけむ。

時は流れ、
世は移り　→　て、久しくなりぬ。

のように用いることができる。つまり、助詞は、文節の枠に封じ込められるような不自由な品詞ではないということだ。「米洗ふ　前○ 蛍が　二つ三つ」の俳句の○にどんな助詞を用いる

か自由に選択できるだけでなく、選択した助詞によって情景が大きく変わってしまうほど重要な品詞である。詩歌の世界でも、古来「弖爾乎波」として重視されてきた所以である。

発話する場合でも、現代でこそ助詞は短く発音され、接尾辞のように扱われがちだが、今よりももっと時の流れがゆるやかで、用法も確定していない古代においては、助詞はもっと長く抑揚をもって揺れながら情感ゆたかに発音され、自立して用いられていたと考えるほうが自然である。日本語が開音節言語で、音節の末尾が必ず母音となっていたのは、長く延ばして発音していた名残りであるからに相違ない。

係り結びから話はそれるが、阪倉篤義は、『語構成の研究』[13] の中で、構文論に関する次のような示唆的な概念図を示し、説明を加えている。

日本語の文構造は、中心に、ことがらの概念的な叙述をすゑて、これを遠まきにするかたちで、そのやうな叙述をなす話し手の態度を明らかにしていく。すなはち、まづ、はじめに、感動語・接続語などによつて以下の陳述をおこなふための予告をしたうへで、題目語によつて主題を提示し、ついで、評釈後によつて陳述の態度を前ぶれしておいて、やがて叙説語によつて叙述のしかたを前提し、さうして様態説明語や情態説明語によつて述語の属性発現の様態や、その概念内容をくはしく限定しておいて、さて、肝心の述語を述べる。それと同時に、一方、述語に下位するものとしては、まづ、すでに上のやうにしてあ程度予定されてゐた叙述を、接尾語①および②がそれぞれおこなひ、助辞を、詞的性格のつよいものから辞的性格のつよいものへとならべて、次第に、うへに評釈語や題目語によって前ぶれされてゐる陳述に呼応する話し手の態度をうちだしていつて、この文を言ひおさめる、といふかたちをとる。

恣意的な解釈を避けるため少し長い引用となったが、簡単に言えば、日本語の構造は卵型でできているということである。図には「接続語」とあるが、それは論理性を重視するようになって以後の日本語のことであり、原初的には「感動語」と読み替えることができよう。

これを言語の発達に即して解釈すると、言語以前に感動語が存在し、感動語のみで一文を構成していた。その後、概念語が生まれ、概念語を感動語が包んで文を構成して一文を構成した。さらに概念語が主述関係に分離して後も、主述関係を感動語が包んで文を構成していったというように、感動語と相似形の文構造が卵型に発展してきたと理解できるのである。具体的な例をあげるならば、

のように、文末の助詞すなわち終助詞が感動詞と呼応して、概念的な内容を包み込む形で文を

終結させるのである。もちろん、独立性の強い感動詞はもとより、終助詞がなければ文が終結しないというわけではない。しかし、終助詞を置ける状態になってはじめて文は終止するものと言えよう。日本語はこのように極めて情意性の強い言語で、それは、主語が決まらないと述語が決まらないまでに主述関係を中心とする欧米語のような論理性の強い言語ではないことだけは確かである。

二つ目の疑問は、倒置法起源説では、元の形として「ぞ」「なむ」「や」「か」という係助詞の直前が体言でない限り説明できないにもかかわらず、用言の直後に用いられる係助詞がきわめて多いことである。起源が倒置法であっても、その後係助詞となって係り結びの形式が残ったという説明がなされるかもしれないが、万葉集の用例をみても、稿末の用例一覧からも分かるように、用言の直後に係助詞が用いられている例の多さからも肯首しがたい。

柿本人麻呂の作とされる有名な歌、

足引きの　山鳥の尾の　しだり尾の　長々し夜を　ひとりかも寝む　（拾遺集 778）

の、元の形が「寝むひとりかも（寝る一人なのかなあ）」であったと考えるのにはどうにも無理がある。元の形は、やはり「ひとり寝むかも（一人寝るのかなあ）」であり、終助詞の「かも」が前に移動したと考えるほうが理にも情にもかなっている。

筑波峯に雪かも降らる　いなをかも　愛しき児ろが　布干さるかも　（14-3351）

という東歌があるが、「筑波山に雪が降っているのかな。いや、違うのかな。いとしいあの子が布を干しているのかな。」の意味であり、「かも」の位置はこのように自在なのである。

三つ目の疑問は、「こそ…已然形」の起源論にかかわる問題であり、本稿の中心をなすものであるため、次項で詳しく述べていきたい。

3　係助詞「こそ」と係り結びの起源について

大野氏の説によれば、係助詞「ぞ」「なむ」「や」か」の場合は、付属語として体言に接続した形で倒置したものと説明している。ところが、「こそ」の場合は、

天つたふ　入日さしぬれ　丈夫と　思へる我も　しきたへの　衣の袖は　とほりてぬれぬ（2-135）

という已然形単独での確定中止法「天つたふ入り日さしねれ、」を認めた上で、「こそ」が単独で、付属語であるにもかかわらず、後から「入り日こそさしぬれ」と挿入されたものだと説明しているのである。係助詞「か」の場合では認めなかった「転置」説や「倒置」説なのに、係助詞「こそ」の場合では「挿入」説で処理しようとするこのダブルスタンダードをどう理解すればよいのだろう。一体、助詞は付属語なのか自立語なのか、その基準すら混乱しているのではないか。これが『係り結びの研究』で、その起源論に終止符を打ったかのごとき大野氏の説かと首を傾げざるを得ない。

さて、一般的に「こそ」の起源は、「此ぞ」であると考えられており、「此」と指示し「ぞ」（古形は清音）と強調する働きを考えれば十分肯首できるものである。しかし、係助詞「ぞ」の結びであれば連体形になるべきであり、「こそ」の結びが已然形となることの説明がつかない。したがって、「ぞ」も「こそ」も、もともと特定の結びがなかったことを出発点に置いて論を進

めたい。

万葉集における「こそ」の用例は214例あり、「こそ」がどのような語に接続したか品詞別に分類すると、およそ次の5種類となる。

A　名詞に接続した「こそ」 84例（39.3%）
B　副詞に接続した「こそ」 1例（0.5%）
C　助詞（接尾辞を含む）に接続した「こそ」 61例（28.5%）
D　連用形に接続した「こそ」 48例（22.4%）
E　連体形に接続した「こそ」 1例（0.5%）
F　已然形に接続した「こそ」 19例（8.9%）

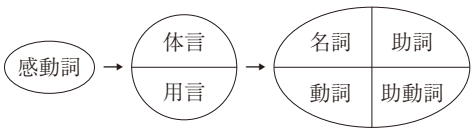
稿末に5種類にわけて一覧表の形で示したので、活用いただきたい。なお、細心の注意を払ったが、万一漏れがあった場合は何卒ご寛恕願いたい。

A　名詞に接続した「こそ」

名詞に接続した「こそ」の例のうち75例（89.3%）は已然形で結ばれている。既に「係り結び」の形式が基本的に成立しているものと考えられ、逐一取り上げて説明することはしない。ただ、石田氏や大野氏は、前掲論文の中で「こそ…已然形」の起源が「本来逆接の前提句」であったと述べているのに対し、稿末の用例一覧のAで示した75例のうち、結びの已然形が逆接確定条件となって次の句に続いているような例は3分の2に満たない。残る3分の1は順接確定条件であったり、詠嘆を含んだ単純な強調表現となっているのである。

已然形は、後ろに接続助詞「ど」が付いて逆接条件となったり、後ろに接続助詞「ば」が付いて順接条件になったりするように、元来、順態か逆態かに関係なく、確定したことを強く言い表すのが已然形の陳述性なのである。

吉田金彦氏は、『上代語助動詞の史的研究』[14] の中で次のような興味深い図を示している。



まず、原初的な言語として感動詞が現れ、それが細胞分裂するかのように体言と用言に分化し、さらに体言は名詞と助詞に、用言は動詞と助動詞に分化するという機能分裂の概念図である。そして、「ああ」といった感動詞に限らず、「花！」と感動詞的に表現できる体言も極めて原始性を持っており、「花咲く」に至って主語・述語に二分されると説いている。

筆者も、「花」が「花咲く」に進化する以前に、「花！」と感動詞的に表現する段階があったと考えている。ただし、「花！」だけでなく「花？」や「花…」もあり得る。「花」の後ろに感動、詠嘆、強意、念押し、呼びかけ、疑問、反語、自問など感動詞的な終助詞（間投助詞や係助詞の原型を含む）が接続して様々な余情表現となって文を形成しえたはずである。「花。」が「花！」

であったり、「花？」であったりするように、強調すれば順態にも逆態にもなりえるのだ。

また、大野氏は、「こそ…已然形」が本来、逆接の条件句であったものが単純な強調となって「係り結び」が成立したと説明するが、「条件句」とは、あまりにも論理性を前提とした解釈である。こうした論理性が日本語の前提としてあったなら、主述の関係も明確な言葉であっただろうし、接続詞ももっと古くから発達していたに違いない。

有名な真間の手児名の歌を例に考えてみよう。

鶏が鳴く　東の国に　古に　ありけることと　今までに　絶へず言ひける　勝鹿の　真間の手児名が　麻衣に　青衿付け　ひたさ麻を　裳には織り着て　髪だにも　掻きは梳らず　沓をだに　はかず行けども　錦綾の　中に包める　斎ひ児も　妹に及かめや　望月の　足れる面わに　花のごと　笑みて立てれば　夏虫の　火に入るがごと　湊入りに　舟漕ぐごとく　行きかぐれ　人の言ふ時　いくばくも　生けらじものを　何すとか　身をたな知りて　波の音の　さわく湊の　奥つ城に　妹が臥やせる　遠き世に　ありけることを　昨日しも　見けむがごとも　思ほゆるかも（9-1807）

この長文を一体どこで句切ったらいいのだろう。どこでも切れそうで、どこでも切れそうにない。敢えて切るとすれば、「妹にしかめや（この子にかなうわけがない）」で切れそうだが、その場合、「や」が終助詞ということになる。しかし、「や」を間投助詞として「この子にかなわないが」と一旦中止し、そんなこの子が「望月の」と続けていっても何の不都合もない。結局、これ以上続きのない最後の「思ほゆるかも（思われてならない）」に至って、詠嘆の終助詞「かも」で結んでいるのである。

日本語の特徴は、中心概念を真ん中におき、感動語で包み込むような情意性の強い言語であるとともに、何事も曖昧に断定を避け、主観を強く出しても、判断は聞き手に任せ、共感を大事にする和の言葉である。主述関係で短く文を構成し、接続詞で論理を積み重ねていくように変化したのは、少なくとも中世以降であり、古代においては主述も不明確で、文末も余情を含んだ曖昧なものであった。だからこそ、句読点らしきものも、近世にいたるまで出現しなかったのだ。

次に、「こそ」の結びが連体形で結ばれている例が７例ある。これも逐一取り上げて説明することはしないが、そのすべてが形容詞の連体形に限られている。形容詞は、元来、「高山」「高照らす」のように語幹のみで体言や用言を修飾するなど、用言としての活用が未成熟であった。そのため、出現が遅れた已然形の代わりに連体形が用いられたのだという説が一般的である。その中で、山口佳紀は、『古代日本語文法の成立の研究』[15] で上代における「こそ…已然形」以外の結びの例として、

イ　体言で結ぶもの
ロ　形容詞の連体形で結ぶもの
ハ　形容詞の終止形＋も で結ぶもの

を挙げ、「体言」「連体形」「終止形＋も」を同価値のものと考え、そこから「連体形終止が一種の感動表現であった」と規定し、「コソの強調的性格が、何らかの平叙的ならざる結びを要求したものと見るべきである」と述べている。形容詞の已然形が未発達であったことを原因に挙げ

つつも、連体形が已然形の「代用」ではないことを指摘している。また、

若ければ　道行き知らじ　幣はせむ　黄泉の使ひ　負ひて通らせ（5-905）

春霞　立ちにし日より　今日までに　わが恋やまず　本の繁けば（10-1910）

青丹よし　奈良の大路は　行きよけど　この山道は　行きあしかりけり（15-3728）

のように僅かながら確定条件を表す已然形語尾として「けれ」や「け」が用いられていることに触れ、形容詞の已然形が形態的に安定しておらず、「け」が被覆形で「けれ」が露出形であることから、独立性の高い「けれ」が確立されるまで結びには用いられなかったと述べている。傾聴すべき見解である。

残る2例のうち1例は次の歌である。

時つ風　吹飯の浜に　出で居つつ　贖ふ命は　妹がためこそ（12-3201）

「妹がためこそ（みんな妻のためです）」で終止する、結びのない例である。係助詞「こそ」が終助詞として機能しているのである。後ろに已然形「なれ」が省略されていると考えることもできようが、音数を揃えるためなら「妹がためなり」でも良く、わざわざ「こそ」で終わっているところにこそ意味を求めなければならないだろう。敢えていうなら、「こそ」は、「は」や「も」を含む他の係助詞と同様に、元来は終助詞であったということである。

最後の1例は、

伊可保世欲（いかほせよ）　奈可中次下　於毛比度路（おもひどろ）　久麻許曽之都等（くまこそしつと）　和須礼西奈布母（わすれせなふも）（14-3419）

という歌であるが、訓読不詳の東歌である。『万葉集全注』[16] では『万葉集全釈』[17] の訓「奈可中次下（なかしし）」に従って、「伊香保背よ　汝が泣かししも　思ひどろ　隈越（こそ）しつと　忘れ為なふも」読んでいる。そうだとすれば、この歌の「こそ」は係助詞でなく、「越す」という動詞の語幹だということになる。いずれにしても、訓読不詳で判断しかねる。

B　副詞に接続した「こそ」

次に、副詞に接続した「こそ」の例であるが、次の1例のみである。

蓮葉は　かくこそあるもの　意吉麻呂が　家なるものは　芋の葉にあらし（16-3826）

「蓮の葉とは何とこういう姿のものだったのか。意吉麻呂の家にあるものは、どうやら芋の葉っぱのようだ」という意味であろう。「かく」は、代名詞「此・彼」に接尾辞「く」が結合して副詞になったものだが、副詞に「こそ」が接続して強調し、「あるもの」で終止している。後ろに結びの「なれ」が省略されていると考えることもできよう。しかし、上述した（12-3201）の歌のように「かくあるものこそ」で詠嘆的に終止し、「それに反して」というニュアンスで次の句につながっているとも解釈できる。これも用例が少ないため、判断は先に延ばしたい。

C　助詞（接尾辞を含む）に接続した「こそ」

助詞または接尾辞に接続した「こそ」は、2番目に多い61例である。助詞は、格助詞「に」「を」「と」が19例、接続助詞「は（ば）」「て」が14例、間投助詞「し」が14例、副助詞「のみ」が4例となっており、接尾辞は、「み」の10例である。

阪倉氏は、前掲の『語構成の研究』の中で、口語・文語に関係なく、助詞相互の承接関係を

次のような順序で示している。

準体助詞（の）
並立助詞（やら・や・と・に・だの　等）
格助詞（が・を・に・へ・と・から・の　等）
副助詞（まで・ばかり・だけ・きり　等）
係助詞（は・も・こそ・さへ・でも　等）
間投助詞（ね・さ・な　等）
終助詞（か・な・ぞ・とも・わ　等）

筆者は、この承接順序を全く別の観点から興味深く読んだ。すなわち、助詞の派生図（終助詞→間投助詞→係助詞→副助詞→格助詞→準体助詞）として理解したのである。もちろん、助詞のすべてが終助詞から生まれたというつもりはない。しかし、終助詞は文末に固定して置かれ、間投助詞は文節末に自由に置かれ、係助詞も叙述に影響を与えるという違いはあるが文節末に自由に置かれ、いずれも何らかの形で感動詞に源を発し、詠嘆や強調、疑問や反語、余情といった情意的なニュアンスを添えるものばかりである。

格助詞も、もとは主格や目的格を表わすものではなく、感動詞や名詞など原初的な品詞を語源とし、終助詞や間投助詞として機能していたもののようだ。「に」は一点を指定する働き、「を」は詠嘆の働き、「と」は強意の働きがあり、体言に接続して用いられると必然的に用言に係っていくため、連用格となって用言との関わりで主格や目的格などへと機能分化していったものであろう。また、阪倉氏提唱の承接関係を示す助詞の中にはないが、接続助詞は、用言に接続して用いられ、次の用言に続けていく単純な列叙から、順接や逆接へと機能分化していったものに違いない。

さて、本稿における関心事は、間投助詞と同様、起源の古さを感じる係助詞が、なぜ叙述に影響を与えるに至ったかという点を明らかにすることである。したがって、本題に話を戻し、「こそ…已然形」が確立している例ではなく、「こそ」自体で終止している例を中心に考えていきたい。

助詞（接尾辞を含む）に接続した「こそ」で、結びがない例として次の６例がある。

①　この岡に　雄鹿踏み起こし　うかねらひ　かもかもすらく　君故にこそ（8-1576）
②　木綿懸けて　祭る三諸の　神さびて　斎ふにはあらず　人目多みこそ（7-1377）
③　言問はぬ　木すら春咲き　秋付けば　黄葉散らくは　常をなみこそ（19-4161）
④　うつたへに　籬の姿　見まく欲り　行かむと言へや　君を見にこそ（4-778）
⑤　息の緒に　我は思へど　人目多みこそ　吹く風に　あらばしばしば　逢ふべきものを（11-2359）
⑥　小里なる　花橘を　引き攀ぢて　折らむとすれど　うら若みこそ（13-3574）

①の歌は、「この岡で鹿を追い立て窺い狙うように、あれやこれやと心を尽くすのも、みんなあなたのことを思ってのことなのです」の意味である。「こそ」がなくとも文意は通じ、「こそ」は単なる強調として用いられているものである。②は、「木綿を懸けて祭るみもろの神も、神様らしく構えて穢れを避けているのではありません。人目が多いからなのです」の意味であ

る。これも、形容詞の語幹に理由を表す接尾辞「み」が付いただけで、「こそ」は単なる強調として用いられているものである。③は、「もの言わぬ木でさえ、春は花が咲き、秋ともなれば色づいて散るのは、物みな常というものがないからなのです」という意味である。これも同様の理由で、「こそ」が単なる強調として用いられているものである。④は、「何を一途に垣根の様子見たさに行こうと言ったりしましょうか。本心は貴方にお逢いしたいからなのです」の意味である。これは、「こそ」が単なる強調ではなく、願望の意味が加わった強調として用いられている。⑤は、「命がけで私はあなたのことを思っているのですが、人目が多いので（どうにもなりません）。私が吹く風であったなら、なんどでも逢うことができように」の意味である。これは、「こそ」が単なる強調ではなく、慨嘆の意味が加わった強調として用いられている。⑥は、「小里にある橘の木を引き寄せて手折ろうとしてみるものの、まだ若木でありすぎて（どうにもためらわれます）」の意味である。これは、「こそ」が単なる強調ではなく、躊躇の意味が加わった強調だと考えられる。

これらを通してみると、単純な強調であれ、願望や慨嘆や躊躇であれ、すべて様々な余情を含んだ詠嘆の終助詞として理解することができる。それと同時に、終助詞が文節の切れ目に飛び込んだなら、「人目こそ多み」「常をこそなみ」「君をこそ見に」などと表現でき、その場合は係助詞として理解されることになろう。

D　連用形に接続した「こそ」

次に連用形に接続した「こそ」の例である。48 例あるが、そのうち 47 例は歌の末尾に用いられ結びがない。しかも、そのすべてが願望の意味で用いられているため、一般的にはこれを係助詞「こそ」とせず、願望の終助詞として解釈している。ただ、吉田氏は『上代語助動詞の研究』の中で、終助詞「こそ」の語源を不完全動詞「来す」に求め、願望の助動詞「こす」の命令形「こそ」として解釈している。願望の命令形というのも釈然としないが、助動詞「こそ」であれ、終助詞「こそ」であれ、係助詞「こそ」と万葉仮名による表記上の区別が全くないため、当時の人々には同一語として認識され、使用されていたのではないかと思われる。そして何よりも、終助詞とは言い切れないような次の 1 例がある。

人の見て　言咎めせぬ　夢にだに　継ぎて見えこそ　我が恋止まむ（12-2958）

「人が見て咎め立てをする気遣いのない夢の中だけでも、絶えず姿を見せてくれたら、私の恋心もおさまるでしょうに」という意味である。明らかに「継ぎて見えこそ」で文が完全には終止せず、条件節となって「我が恋止まむ」に続いている。そうだとすれば、係り結びによって、文末は「将息（やまむ）」ではなく、「止目（やまめ）」とか「止米（やまめ）」のように已然形であることを明確にしただろう。しかし、「八方（やも）」が下接している場合はすべて「将有（あらめ）」「将解（とかめ）」などと已然形で訓読しており、「已然形＋『や』」を当然のこととして扱っている。同様に、「こそ…已然形」が当然のことであるなら、「止まめ」と已然形で読むことも可能であろう。しかしながら、一般的には「こそ」を願望の終助詞で処理し、「絶えず姿を見せておくれ。」と言い切り、次に「そうすれば」というニュアンスを添えて、「私の恋心もおさまるでしょう」と解釈しているのである。

ただ、願望と逆接との意味的な違いはさほど遠いものでなく、「今社鳴米」（8-1481）や「今

社鳴目」（10-1947）は「今こそ鳴かめ」と訓じるが、これを「今こそ鳴いておくれ」と訳せば願望になり、「今こそ鳴けばいいのに」と訳せば逆接のムードで次の句に繋がっていくことになる。つまり、古代日本語における「条件節」とは、所詮そのような曖昧なものであって、続いていると思えば続いているし、終わったと思えば終わっているのだ。また、活用語尾の音韻についても、「伊母尓都氣許曽」（20-4363）や「伊母尓都岐許曽」（20-4365）のように、話し手の気分一つで揺れるものであったに違いない。

係助詞の原初形態を終助詞と考える筆者の立場からすれば、何の躊躇もなく、係助詞「こそ」の終助詞的用法の一つとして捉える。願望の終助詞としては未然形接続の「なも（なむ）」があり、これが強意の係助詞「なも（なむ）」に発展している。願望の終助詞「こそ」が強意の係助詞「こそ」に発展して何の不思議もない。ただ、未然形接続の願望と連用形接続の願望との意味的な違いを明らかにする必要があろう。私見であるが、未然形と連用形の陳述性の違いによるものではないかと考えている。すなわち、願望の実現性や程度に差があり、

三輪山を　然も隠すか　雲だにも　心あらなも　隠さふべしや（1-18）

かくしつつ　遊び飲みこそ　草木すら　春は生ひつつ　秋は散り行く（6-995）

のように、未然形接続の願望は、「雲に心があるはずはないが、あってほしい」のように実現性が低く、淡い期待をかける場合に用い、連用形接続の願望は、「飲んで遊んでください」のように実現性が高く強く、強く勧める場合に用いたのではないかと考えているが、今後の課題としたい。

E　連体形に接続した「こそ」

次に、連体形に接続した「こそ」であるが、次の１例のみである。

栲衾　白山風の　寝なへども　児ろがおそきの　あろこそ良しも（14-3509）

これも東歌で、「白山颪で寒くて寝付かれないが、可愛いあの子にもらった襲衣があることだけが嬉しいことだ」の意味であろう。「あろ」は連体形「ある」の方言で、「あること」という意味で用いる準体法だと考えられ、Ａの体言に接続した「こそ」と同様のものとして理解できる。

F　已然形に接続した「こそ」

最後に、已然形に接続した「こそ」である。大野氏の『係り結びの研究』では20例あるというが、残念ながら筆者には稿末の用例一覧Ｅに示した19例しか確認できなかった。用例こそ少ないが、これらは本稿の中心部分をなすため、すべての用例を詳しく見ていきたい。

まず19例中15例が已然形で結んでいる。「こそ…已然形」という係り結びが成立しているものであるが、已然形の意味を明確にするため、順接（だから）・逆接（なのに）の違いを明示した。なお、文末の已然形は次の句につながりそうなムードを斟酌し、一般的な解釈を参考に順接・逆接を明示した。

①　…天地も　依りてあれこそ…檜のつまでも…浮かべ流せれ（1-50）

「天地の神も大君に心服しているからこそ（順接）、…檜丸太を…浮かべ流しているのです。（順接）」

② 嘆きつつ　益荒男の　恋ふれこそ　我が結ふ髪の　漬ちて濡れけれ（2-118）
「益荒男が嘆き苦しむほど恋い慕って下さるからこそ（順接）、結った私の髪が濡れて解けたのですね。（順接）」

③ 否と言へど　語れ語れと　宣らせこそ　志斐いは申せ　強ひ語りと言ふ（3-237）
「もういやですと申しても、語れ語れと仰るからこそ（順接）、志斐めはお話申し上げているのです。（逆接）よくも無理強いなどと仰ることですね。」

④ 我が背子が　かく恋ふれこそ　ぬばたまの　夢に見えつつ　寝ねらえずけれ（4-639）
「あなたがこんなにも私を恋しく思って下さるからこそ（順接）、夢にお姿が現れて寝つかせてくれなかったのですね。（強調）」

⑤ 後瀬山　後も逢はむと　思へこそ　死ぬべきものを　今日までも生けれ（4-739）
「後瀬山の名のようにこの後も逢おうと思っているからこそ（順接）、死ぬはずのところを今日まで生き永らえているのです。（逆接）」

⑥ 明日香川　七瀬の淀に　棲む鳥も　心あれこそ　波立たざらめ（7-1366）
「明日香川の七瀬の淀に棲む鳥すら、思いやりがあるからこそ（順接）、波を立てないでいるのでしょう。（逆接）」

⑦ 恋ひつつも　後に逢はむと　思へこそ　おのが命を　長く欲りすれ（12-2868）
「恋に苦しみながらも、後にはきっと逢おうと思っているからこそ（順接）、はかないこの命を長かれと願っているのです。（逆接）」

⑧ 夕さらば　君に逢はむと　思へこそ　日の暮るらくも　嬉しくありけれ（12-2922）
「夕方にはあなたにお遭いできると思うからこそ（順接）、日が暮れて暗くなってゆくのも嬉しくてなりませんでした。（逆接）」

⑨ 然れこそ　年の八年を　切り髪の　よち子を過ぎ　橘の　ほつ枝を過ぎて　この川の　下にも長く　汝が心待て（13-3307）
「だからこそ（順接）、私は長年、切り髪の年頃を過ごして橘の枝先よりも背丈が伸びた今日まで、この川のように長くあなたの心がこっちに向くのを待っていたのです。（逆接）」

⑩ …思へこそ　年の八年を　切り髪の　よち子を過ぎ　橘の　ほつ枝をすぐり　この川の下にも長く　汝が心待て（13-3309）
「…あなたを思っているからこそ（順接）、長年、切り髪の年頃を過ごして橘の枝先よりも背丈が伸びた今日まで、この川のように長くあなたの心がこっちに向くのを待っていたのです。（逆接）」

⑪ ありさりて　後も逢はむと　思へこそ　露の命も　継ぎつつ渡れ（17-3933）
「変わらぬ心をずっと持ち続けて、後々きっと逢おうと思うからこそ（順接）、はかないこの命も繋ぎとめて、日々を過ごしているのです。（逆接）」

⑫ 鯨魚取り　海や死にする　山や死にする　死ぬれこそ　海は潮干て　山は枯れすれ（16-3852）
「海は死ぬだろうか、山は死ぬだろうか。やはり死ぬからこそ（順接）、海は潮が干れる

し、山は草木が枯れたりするのですね。（強調）」

⑬　葦垣の　外にも君が　寄り立たし　恋ひけれこそば　夢に見えけれ（17-3977）

「葦の垣根の外にあなたが寄り立たれながら、私に心を寄せていて下さったからこそ（順接）、お姿が夢に見えたのですね。（強調）」

⑭　小百合花　ゆりも逢はむと　思へこそ　今のまさかも　麗しみすれ（18-4088）

「百合の花のようにゆり＝将来も逢いたいと思うからこそ（順接）、今の今でもこんなに親しませていただいているのです。（強調）」

⑮　鳴く鶏は　いやしき鳴けど　降る雪の　千重に積めこそ　我が立ちかてね（19-4234）

「朝を告げて鳴く鶏はしきりに鳴き立てるけれど、降る雪が幾重にも降り積もるもからこそ（順接）、私は腰を上げかねているのです。（強調）」

以上15例において、結びの已然形が逆接確定条件として次の句につながるムードを持っているものは、多く見ても③⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪の８例、順接確定条件のムードや詠嘆を含んだ強調表現となっているのが①②④⑫⑬⑭⑮の７例である。このように結びの已然形は順接・逆接とは関係なく用いられているのに対し、「こそ」の直前の已然形については、15例すべてが順接確定条件のムードで、理由を詠嘆的に強調しているものばかりである。つまり、順接にも逆接にもなりうる結びの已然形は、已然形そのものの陳述機能であって、「こそ」の直前の已然形こそが係り結びに発展しうる固定的な法則性を示しているということである。

①から⑮の歌は、すべて「こそ」が係助詞であることを前提に次の句につながるように解釈したが、仮に「こそ」を終助詞として処理するなら、15例すべてが「…だからです。」「…なのです。」のような理由を詠嘆的に強調して終止する文となる。恣意的な解釈だという謗りを受けかねないので、結びのない２例で考えてみよう。

⑯　草枕　旅行く君を　荒津まで　送りぞ来ぬる　飽き足らねこそ（12-3216）

「遠く旅立って行かれるあなたを見送りに、とうとう荒津まで来てしまいました。いつまでも心残りでございますので。」

⑰　…玉鉾の　道はし遠く　関さへに　隔りてあれこそ　よしゑやし…（17-3978）

「…都への道は遠い上に、関所までが遮っているのです。ええ、ままよ…」

ともに理由を詠嘆的に強調して終止していることが分かる。この終助詞的な用法こそが係助詞「こそ」の原初的な形態なのだと考える。その場合、⑯の歌は「飽きこそ足らね。」、⑰の歌は「隔りてこそあれ。」という係り結びの文へと発展しうるのである。このことは、①から⑮までの歌についても、「こそ」を終助詞として文を切ってみれば、同様の係り結びを構成することができることからも言えよう。

残りの２例のうち１例は、

⑱　香具山は　畝傍を惜しと　耳成と　相争ひき　神代より　かくにあるらし　古も
　　然にあれこそ　うつせみも　妻を　争ふらしき（1-13）

であり、これは不活用の助動詞「らし」が形容詞と同形の語尾「し」を持つため、形容詞の連体形語尾「しき」が衍用された結びとして理解できる。しかし、「こそ」を終助詞として文を詠嘆的に切り、「だから」のニュアンスを添えて、「今の世でも…」と理解するならば、文末が終

止形であっても何の問題もないことになる。

最後の１例は、

⑲ …然れこそ　神の御代より　宜しなへ　この橘を　時じくの　香の木の実と　名付けけらしも（18-4111）

であるが、「こそ」が意味的に係っていくとすれば「名付けけらしも」であり、結びは詠嘆の終助詞「も」ということになる。「こそ…已然形」という係り結びにはなっていないが、この場合も、終助詞「こそ」で一旦終わっていると考えれば何の問題もない。「…そうだからなのです。神の御代から、いみじくもこの橘を時じくのかくの木の実と名付けたのでしょうね」という二つの文に分かれるだけのことである。

すべての用例を通じて、「こそ」を強調の終助詞として処理するならば、直前の文節の切れ目に「こそ」を移動しただけで、見事な係り結びが成立する。つまり、「こそ…已然形」は終助詞が起源だったのである。「連用形＋こそ」は願望の終助詞であったが、「未然形＋なも（なむ）」に吸収されて用いられなくなった。一方、「已然形＋こそ」は理由を詠嘆的に強調する終助詞として用いられていたが、終助詞「こそ」が文中に移動することによって係助詞となり、「こそ…已然形」という係り結びが形成されたというのが本稿の結論である。

おわりに

助詞の中でも特に自立性の高い終助詞は、文中の文節末でも比較的自由に挿入され、間投助詞や係助詞となったが、間投助詞は軽く強調するだけで叙述の構造に影響することはなかった。しかし、係助詞は強調の度合いが強く、叙述の構造に影響を及ぼした。その際、終助詞として用いられた「已然形＋こそ」の形式が顛倒した形で「こそ…已然形」の結びが固定化し、係り結びの現象が文語として後世まで存続した。

なお、本稿では述べなかったが、「連体形＋ぞ・なむ・や・か」の形式が顛倒した形で成立した「ぞ・なむ・や・か…連体形」の係り結びについては、中世に至り、武家言葉の強い言い切り方として連体形終止が一般化し、連体形が普通の終止法となったため自然消滅していったものと考えている。また、終止形接続が多い終助詞「や」が係助詞として用いられた場合、連体形終止となることについては、紙面の都合で稿を改めることとした。

以上述べてきたように、同一の構成原理で係り結びを捉え直すことができれば、「はじめに」で述べたような係り結び指導が学校現場で可能となり、有用な指導法として用いることができるものと考える。これによって、高等学校における古典文法指導が暗記を強要する苦痛の学習ではなく、古典文法の楽しさ奥深さを学ぶとともに、日本語の素晴らしさに気づき、それを主体的に守り育てていく態度を形成するための指導法の一助となればこれに過ぎる喜びはない。

浅学ゆえの非礼の段は、なにとぞご寛恕賜り、大方のご批正をお願いする次第である。

『万葉集』における「こそ」の用例一覧

凡例：接続は「こそ」に上接する品詞名、意味は「こそ」の意味、結びは「こそ」の結び、関係は結び直後の句との関係を表したものであり、用例は「結び」の活用形や品詞ごとにまとめて示した。なお、用例は『万葉集 本文篇』[18]、訓は『万葉集 訳文篇』[19]、訳は『万葉集 釋注』[20] に依った。すべて底本は西本願寺本万葉集である。

A　名詞に接続した「こそ」

巻	歌番号	接続	意味	結び	関係	用例	訓（訳）
1	1	名詞	強調	已然形	逆接	吾許曽居。	我こそ居れ。 （私が平らげているのですが。）
1	1	名詞	強調	已然形	逆接	吾己曽座。	我こそいませ。 （私が治めているのですが。）
1	1	名詞	強調	已然形		吾許背歯、告目。	我こそば、告らめ。 （わたしの方からうち明けましょう。）
1	52	名詞	強調	已然形		水許曽婆、常尓有米。	水こそば、常にあらめ。 （水こそは、常にあるでしょう。）
2	92	名詞	強調	已然形		吾許曽益目。	我こそ益さめ。 （私こそまさっているでしょう。）
2	131	名詞	強調	已然形	逆接	人社見良米。	人こそ見らめ。 （人は見もしましょうが。）
2	131	名詞	強調	已然形	逆接	人社見良米。	人こそ見らめ。 （人は見もしましょうが。）
2	131	名詞	強調	已然形		風社依米。	風こそ寄せめ。 （風が吹き寄せるでしょう。）
2	131	名詞	強調	已然形		浪社来縁。	浪こそ来寄れ。 （波が寄って来るでしょう。）
2	138	名詞	強調	已然形	逆接	人社見良米。	人こそ見らめ。 （人は見もしましょうが。）
2	138	名詞	強調	已然形	逆接	人社見良米。	人こそ見らめ。 （人は見もしましょうが。）
2	138	名詞	強調	已然形		浪己曽来依。	浪こそ来寄れ。 （波が寄って来るのです。）
2	138	名詞	強調	已然形		風己曽来依。	風こそ来寄れ。 （風が寄って来るのです。）
2	145	名詞	強調	已然形	逆接	人社不知。	人こそ知らね。 （人にこそわかりませんが。）
2	217	名詞	強調	已然形	逆接	露己曽婆、…消等言。	露こそば、…消ゆといへ。 （露なら、…消えるといいますが。）
2	217	名詞	強調	已然形	逆接	霧己曽婆、…失等言。	霧こそば、…失すといへ。 （霧なら、…なくなるといいますが。）
3	239	名詞	強調	已然形	逆接	十六社者、伊波比拜目。	鹿こそば、い這ひ拝め。 （鹿は、膝を折って這うように皇子を敬っていますが。）
3	239	名詞	強調	已然形	逆接	鶉己曽、伊波比廻礼。	鶉こそ、い這ひもとほれ。 （鶉は、うろうろとおそばを這いまわっていますが。）
3	281	名詞	強調	已然形	逆接	君社見良目。	君こそ見らめ。 （あなたは、ご覧になっておられるのでしょうが。）
3	312	名詞	強調	已然形	逆接	昔者社、…所言奚米。	昔こそ、…言はれけめ。 （昔は、…軽んじられもしたでしょうが。）
3	444	名詞	強調	已然形	逆接	昨日社、公者在然。	昨日こそ、君はありしか。 （昨日こそ、あなたは生きていましたのに。）
3	474	名詞	強調	已然形	逆接	昔許曽、外尓毛見之加。	昔こそ、外にも見しか。 （昔こそ、関係ないものと思っていましたが。）
4	560	名詞	強調	已然形	逆接	為社妹乎、欲見為礼。	ためこそ妹を、見まく欲りすれ。 （そのためにこそ、あなたの顔を見たいと思いますのに。）

4	635	名詞	強調	已然形		珠社所念。	玉こそ思ほゆれ。 (玉のようにあなたが思われるのです。)
4	647	名詞	強調	已然形		人之事社、繁君尓阿礼。	人の言こそ、繁き君にあれ。 (人の噂こそ、絶えないあなたですから。)
4	674	名詞	強調	已然形		相而後社、悔二破有跡五十戸。	逢ひて後こそ、悔いにはありといへ。 (逢ってしまった後で、きっと後悔するものと人は言います。)
5	857	名詞	強調	已然形		和礼許曽末加米。	我こそまかめ。 (私は、枕ににしたいものです。)
5	878	名詞	強調	已然形		能知許曽斯良米。	後こそ知らめ。 (後になって思い知らされるのでしょう。)
6	963	名詞	強調	已然形	逆接	神社者、名著始鶏目。	神こそば、名付けそめけめ。 (神が、初めて名づけられたのでしょうが。)
7	1098	名詞	強調	已然形		妹許曽有来。	妹こそありけれ。 (妹山があったのですね。)
7	1252	名詞	強調	已然形	逆接	人社者、意保尓毛言目。	人こそば、おほにも言はめ。 (人は、平凡な景色だというでしょうが。)
7	1391	名詞	強調	已然形		風許増不令依。	風こそ寄せね。 (風さえ寄せてくれません。)
8	1475	名詞	強調	已然形	逆接	戀許曽益礼。	恋こそ増され。 (恋心が募るだけですのに。)
8	1481	名詞	願望	已然形		今社鳴米。	今こそ鳴かめ。 (今こそ鳴いておくれ。)
8	1629	名詞	強調	已然形	逆接	山鳥許曽婆、…嬬問為云。	山鳥こそば、…妻問ひすといへ。 (山鳥なら、…妻どいをするといいますのに。)
9	1751	名詞	強調	已然形	逆接	昨日己曽、吾超来壮鹿。	昨日こそ、我が越え来しか。 (昨日、私は越えてきましたが。)
9	1782	名詞	強調	已然形	逆接	雪己曽波、春日消良米。	雪こそは、春日消ゆらめ。 (雪ならば、春の日差しに消えもしましょうが。)
9	1790	名詞	強調	已然形	逆接	妻問鹿許曽、…子持有跡五十戸。	妻問ふ鹿こそ、…子持てりといへ。 (妻どう鹿は、…子を持っているいといいますが。)
10	1843	名詞	強調	已然形	逆接	昨日社、年者極之賀。	昨日こそ、年は果てしか。 (昨日、年は暮れたばかりですのに。)
10	1947	名詞	願望	已然形		今社鳴目。	今こそ鳴かめ。 (今こそ鳴いておくれ。)
10	1951	名詞	強調	已然形	逆接	今社者、…来喧響目。	今こそば、…来鳴きとよめめ。 (今こそ、…やって来て鳴きたててくれればいいのに。)
10	1990	名詞	強調	已然形	逆接	吾社葉、憎毛有目。	我こそば、憎くもあらめ。 (私のことを、嫌な女だとお思いでしょうが。)
10	2145	名詞	強調	已然形		戀許曽益焉。	恋こそ増され。 (恋心は募るばかりです。)
10	2211	名詞	強調	已然形		今許曽黄葉、始而有家礼。	今こそもみち、そめてありけれ。 (今まさにもみじし、はじめています。)
10	2269	名詞	強調	已然形	逆接	戀許曽益也。	恋こそ増され。 (恋心が募るばかりなのですが。)
11	2559	名詞	強調	已然形	逆接	今日社間。	今日こそ隔て。 (今日一日を隔てているだけなのに。)
11	2592	名詞	強調	已然形	逆接	生日社、見幕欲為礼。	生ける日にこそ、見まく欲りすれ。 (生きている今こそ、あなたに逢いたいのに。)
11	2670	名詞	強調	已然形		戀社益。	恋こそ増さめ。 (恋心がいっそう募ってくるでしょう。)
11	2831	名詞	強調	已然形	逆接	吾社益。	吾こそまされ。 (私のほうがずっと増さっているのですが。)
11	2838	名詞	強調	已然形	逆接	瀬社因目。	瀬にこそ寄らめ。 (瀬に寄ってくれればいいのですが。)
12	2911	名詞	強調	已然形	逆接	眼社忍礼。	目こそ忍ぶれ。 (逢うことだけは我慢していますが。)
12	2925	名詞	強調	已然形	逆接	為社乳母者、求云。	ためこそ乳母は、求むといへ。 (ためにこそ乳母は、探し求めるものと言いますのに。)

12	2931	名詞	強調	已然形		吾社湯亀。	我こそ行かめ。 （私の方から参ります。）
12	2996	名詞	強調	已然形		事社者、…常不所忘。	言こそば、…常忘らえね。 （あなたの言葉こそ、…いつも忘れられません。）
12	3004	名詞	強調	已然形	逆接	将失日社、吾戀止目。	失せなむ日こそ、我が恋止まめ。 （なくなるような日があれば、私の恋心も静まるでしょうが。）
12	3048	名詞	強調	已然形		戀社益。	恋こそ増され。 （恋心が募るばかりです。）
12	3114	名詞	強調	已然形		人之言社、繁君尓有。	人の言こそ、繁き君にあれ。 （人の噂こそ、絶えないあなたですから。）
13	3327	名詞	強調	已然形	逆接	草社者、取而飼曰戸。	草こそば、取りて飼ふといへ。 （草は、取って食わせているのに。）
13	3327	名詞	強調	已然形	逆接	水社者、挹而飼曰戸。	水こそば、汲みて飼ふといへ。 （水は、汲んで飲ませているのに。）
13	3330	名詞	強調	已然形	逆接	衣社薄、…又母相登言。	衣こそば、…またも逢ふといへ。 （衣なら、…また合うといいますが。）
13	3330	名詞	強調	已然形	逆接	玉社者、…又物逢登曰。	玉こそば、…またも逢ふといへ。 （玉なら、…また合うといいますが。）
13	3332	名詞	強調	已然形	逆接	与海社者、…然真有目。	海とこそば、…然直ならめ。 （海とは、…しかとそのまま存在しているのでしょうが。）
14	3367	名詞	強調	已然形	逆接	目許曽可流良米。	目こそ離るらめ。
							（目を合わせる機会は遠のいているのでしょうが。）
14	3397	名詞	強調	已然形	逆接	多麻毛許曽、比氣波多延須礼。	玉藻こそ、引けば絶えすれ。 （玉藻なら、引けば絶えもしましょうが。）
14	3417	名詞	強調	已然形		伊麻許曽麻左礼。	今こそ増され。 （今のほうが思いが募るとは。）
14	3490	名詞	強調	已然形	逆接	麻左可許曽、…奈乎波思尓於家礼。	まさかこそ、…汝を端に置けれ。 （今でこそ、…あなたを端に置いているけれど。）
14	3491	名詞	強調	已然形	逆接	楊奈疑許曽、伎礼波伴要須礼。	楊こそ、伐れば生えすれ。 （柳なら、伐ればまた生えてもきますが。）
14	3522	名詞	強調	已然形	逆接	伎曽許曽波、兒呂等左宿之香。	昨夜こそは、児ろとさ寝しか。 （ほんの夕べ、あの子と寝たばかりなのに。）
15	3757	名詞	強調	已然形	逆接	安我未許曽、…許己尓安良米。	我が身こそ、…ここにあらめ。 （我が身こそ、…ここにいますが。）
16	3864	名詞	強調	已然形	逆接	官許曽、指弓毛遣米。	官こそ、さしても遣らめ。 （お役所なら、名指しで遣わしもしましょうが。）
17	3893	名詞	強調	已然形	逆接	昨日許曽、敷奈弖婆勢之可。	昨日こそ、舟出はせしか。 （つい昨日、船出をしたばかりなのに。）
17	3956	名詞	強調	已然形		伊麻許曽婆、…安倍弖許藝泥米。	今こそば、…あへて漕ぎ出め。 （今こそ、…押し切って漕ぎ出そう。）
18	4073	名詞	強調	已然形		夜麻許曽婆、…敝太弖多里家礼。	山こそば、…隔てたりけれ。 （山は、…遮っていたりして。）
19	4186	名詞	強調	已然形		戀己曽益礼。	恋こそ増され。 （恋しさが募るばかりです。）
20	4317	名詞	強調	已然形		伊麻己曽由可米。	今こそ行かめ。 （今こそ出かけてみたいものです。）
3	466	名詞	強調	連体形	逆接	胸己所痛。	胸こそ痛き。 （胸が痛みますのに。）
4	484	名詞	強調	連体形	逆接	一日社、人母待吉。	一日こそ、人も待ちよき。 （一日ぐらいなら、人を待つのもたやすいことでしょうが。）
8	1629	名詞	強調	連体形		胸許曽痛。	胸こそ痛き。 （胸が痛んでなりません。）
11	2651	名詞	強調	連体形		己妻許曽、常目頬次吉。	己が妻こそ、常めづらしき。 （私の妻こそ、いつも可愛くてなりません。）
11	2781	名詞	強調	連体形		最今社、戀者為便無寸。	もとも今こそ、恋はすべなき。 （最も激しい今、私の恋はどうしようもありません。）
11	2823	名詞	強調	連体形		君社吾尓、…縁時毛無。	君こそ我に、…寄る時もなき。 （あなたこそ私に、…寄るときなどないではありませんか。）

17	4011	名詞	強調	連体形		久佐許曽之既吉。	草こそ繁き。 （草は茂りに茂っています。）
12	3201	名詞	強調	なし		妹之為社。	妹がためこそ。 （妻のためです。）
14	3419	名詞	不明	不明	不明	久麻許曽之都等。	隈こそしつ、と。 （不明）

B　副詞に接続した「こそ」

巻	歌番号	接続	意味	結び	関係	用例	訓（訳）
16	3826	副詞	強調	名詞		如是許曽有物。	かくこそあるもの。 （こういう姿のものなのですね。）

C　助詞（接辞を含む）に接続した「こそ」

巻	歌番号	接続	意味	結び	関係	用例	訓（訳）
5	815	助詞	強調	已然形		可久斯許曽、…多努之岐乎倍米。	かくしこそ、…楽しき終へめ。 （このように、…楽しみの限りを尽くしましょう。）
5	833	助詞	強調	已然形		可久斯許曽、…多努志久能麻米。	かくしこそ、…楽しく飲まめ。 （このように、…楽しく飲もうではありませんか。）
10	2316	助詞	強調	已然形		宇倍志社、…雪者不消家礼。	うべしこそ、…雪は消ずけれ。 （なるほどそれで、…雪は消えないのですね。）
17	3985	助詞	強調	已然形		可久之許曽、…加氣氐之努波米。	かくしこそ、…懸けて偲はめ。 （このように、…心に懸けて偲ぶのでしょう。）
17	3993	助詞	強調	已然形		可久之許曽、美母安吉良米々。	かくしこそ、見も明らめめ。 （このように眺めてたのしみたいものです。）
18	4071	助詞	強調	已然形		可久之許曽、…多努之久安蘇婆米。	かくしこそ、…楽しく遊ばめ。 （このように、…楽しく遊びましょう。）
18	4098	助詞	強調	已然形		可久之許曽、都可倍麻都良米。	かくしこそ、仕へ奉らめ。 （このようにして、お仕え申し上げましょう。）
19	4147	助詞	強調	已然形		可久之許曽、…之努比来尓家礼。	うべしこそ、…偲び来にけれ。 （なるほど、…心引かれてきたのですね。）
19	4187	助詞	強調	已然形		如是己曽、…見都追思努波米。	かくしこそ、…見つつ偲ばめ。 （こうして、…見ては賞めましょう。）
19	4188	助詞	強調	已然形		如此許曽、…年尓之努波米。	かくしこそ、…年にしのはめ。 （このように、…来る年来る年も愛でましょう。）
19	4267	助詞	強調	已然形		如是己曽、見為安伎良目米。	かくしこそ、見し明らめめ。 （このように、ご覧になって心を晴らされるのでしょう。）
20	4485	助詞	強調	已然形		可久之許曽、売之安伎良米晩。	かくしこそ、見し明らめめ。 （このように、ご覧になってお心を晴らされるでしょう。）
4	678	助詞	強調	已然形	逆接	見而者耳社、…吾恋止眼。	見てばのみこそ、…吾が恋止まめ。 （お逢いした時こそ、…私の恋もおさまるでしょうが。）
6	1005	助詞	強調	已然形	逆接	盡者耳社、…止時裳有目。	尽きばのみこそ、…止む時もあらめ。 （尽きてなくなりでもしたら、…なくなる時もあるでしょうが。）
6	1005	助詞	強調	已然形	逆接	絶者耳社、…止時裳有目。	絶えばのみこそ、…止む時もあらめ。 （絶えたりでもしたら、…なくなる時もあるでしょうが。）
13	3298	助詞	強調	已然形		各鑿社吾、恋度七目。	かくのみこそ我が、恋ひわたりなめ。 （こんな有様で私は、恋い焦がれ続けるだけなのでしょうから。）
11	2575	助詞	強調	已然形	逆接	君乎見常衣、…眉根掻礼。	君を見えとこそ、…眉根掻きつれ。 （あなたに逢いたばかりに、…眉を掻きましたのに。）
7	1098	助詞	強調	已然形	逆接	木道尓社、妹山在云。	紀伊路にこそ、妹山ありといえ。 （紀伊路に、妹山があると世間では言いますが。）
10	2055	助詞	強調	已然形		年尓社候。	年にこそ待て。 （一年かけて待たねばならないのです。）
10	2104	助詞	強調	已然形		夕陰社、咲益家礼。	夕影にこそ、咲き増さりけれ。 （夕方の光の中でこそ、ひときわ咲きにおうものですね。）
11	2766	助詞	強調	已然形		苅尓社、…念有来。	仮にこそ、…思ひたりけれ。 （かりそめの気持ちで、…思っていたのですね。）

14	3478	助詞	強調	已然形		奈尓己曽与佐礼。	汝にこそ寄され。 （あなたに関係があると噂を立てられています。）
14	3605	助詞	強調	已然形	逆接	多延無日尓許曽、安我故非夜麻米。	絶えむ日にこそ、我が恋止まめ。 （絶える日があったなら、私の恋心もなくなるでしょうが。）
15	3718	助詞	強調	已然形		奈尓許曽安里家礼。	名にこそありけれ。 （名前だけのことでした。）
18	4094	助詞	強調	已然形		敝尓許曽死米。	辺にこそ死なめ。 （お側で死にましょう。）
4	494	助詞	強調	已然形	逆接	人乎許曽、…恨三念。	人をこそ、…恨めしみ思へ。 （その人をこそ、…恨めしく思うのですが。）
4	622	助詞	強調	已然形	逆接	汝乎社念。	汝をこそ思へ。 （あなたのことしか思っていないのに。）
4	629	助詞	強調	已然形	逆接	君乎社、…待難為礼。	君をこそ、…待ちかてにすれ。 （あなただけを、…待ちかねていますのに。）
10	2349	助詞	強調	已然形	逆接	君乎社待也。	君をこそ待て。 （あなたをひたすらお待ちしておりますのに。）
14	3493	助詞	強調	已然形		奈乎許曽麻多売。	汝をこそ待ため。 （あなたの来るのを待ちましょう。）
14	3531	助詞	強調	已然形	逆接	伊母乎許曽、安比美尓許思可。	妹をこそ、相見に来しか。 （あなたに逢いに来ただけなのに。）
7	1365	助詞	強調	已然形		實成而許曽、戀益家礼。	実に成りてこそ、恋増さりけれ。 （実になってからの方が、恋心は募るのです。）
8	1584	助詞	強調	已然形		似許曽有家礼。	似てこそありけれ。 （似ていらっしゃいます。）
14	3497	助詞	強調	已然形		左宿左寐弖許曽、己登尓弖尓思可。	さ寝さ寝てこそ、言に出にしか。 （寝てばかりいたから、噂が立ってしまったのですね。）
4	605	助詞	強調	已然形	逆接	無者社、…不相死為目。	なくはこそ、…逢はず死にせめ。 （もしなかったなら、…逢わずに死ぬことになるでしょうが。）
4	749	助詞	強調	已然形	逆接	所見者社有。	見えばこそあれ。 （姿を見せてくれればいいのですが。）
6	1054	助詞	強調	已然形	逆接	絶者許曽、…遷往目。	絶えばこそ、…うつろい行かめ。 （絶えることがあれば、…寂れていくこともあるでしょうが。）
7	1382	助詞	強調	已然形	逆接	絶者許曽、…不遂登思歯目。	絶えばこそ、…遂げじと思はめ。 （絶えることがあれば、…遂げられないと思うでしょうが。）
7	1414	助詞	強調	已然形	逆接	在者社、…吾惜責。	あらばこそ、…我が惜しみせめ。 （生きていたなら、…私も惜しんだりするでしょうが。）
11	2524	助詞	強調	已然形	逆接	直相者社、名者立米。	直に逢はばこそ、名は立ため。 （直にお逢いしたのなら、浮名が立ったりもしましょうが。）
13	3263	助詞	強調	已然形	逆接	有跡謂者社、…家尓毛由可目。	ありと言はばこそ、…家にも行かめ。 （いると言うのなら、…家に帰りもしましょうが。）
15	3740	助詞	強調	已然形	逆接	安良婆許曽、…安波受思仁世米。	あらばこそ、…逢はず死にせめ。 （あったなら、…逢わずに死ぬかもしれませんが。）
16	3792	助詞	強調	已然形	逆接	死者木苑、相不見在目。	死なばこそ、相見ずあらめ。 （もし死んでいたら、こんな目にあわずにすんだでしょうが。）
16	3809	助詞	強調	已然形	逆接	有者許曽、…反賜米。	あればこそ、…返したまはめ。 （あるのでしたら、…お返しいただきたいのですが。）
4	731	接辞	強調	已然形		惜社泣。	惜しみこそ泣け。 （悔しいからこそ泣くのです。）
11	2647	接辞	強調	已然形	逆接	遠見社、目言疎良米。	遠みこそ、目言離るらめ。 （遠くにいるから、逢うことも語ることもないのでしょうが。）
11	2697	接辞	強調	已然形	逆接	惜社、…燎乍渡。	惜しみこそ、…燃えつつ渡れ。 （悔しいからこそ、…思いを燃やして過ごしていますのに。）
11	2697	接辞	強調	已然形	逆接	惜己曽、…燎乍毛居。	惜しみこそ、…燃えつつも居れ。 （悔しいからこそ、…思いを燃やしてこらえていますのに。）
14	3468	接辞	強調	已然形		刀奈布倍美許曽、奈尓与曽利鶏米。	となふべみこそ、汝に寄そりけめ。 （唱えごとをするから、あなたに言い寄せられたのでしょう。）
6	1050	助詞	強調	助詞		諾己曽、…定異等霜。	うべしこそ、…定めけらしも。 （なるほどそうだから、…定めたのでしょう。）

6	1051	接辞	強調	助詞		清見社、…定異等霜。	清みこそ、…定めけらしも。 (清らかだからこそ、…定めたのでしょう。)
16	3886	助詞	強調	名詞	逆接	馬尓己曽、布毛太志可久物。	馬にこそ、ふもだし懸くもの。 (馬になら絆を懸けるものなのに。)
7	1065	助詞	強調	連体形		諾石社、…偲家良思吉。	うべしこそ、…偲びけらしき。 (だからこそ、…偲んだのでしょう。)
12	2865	助詞	強調	連体形	逆接	有者許曽、…歓有倍吉。	あらばこそ、…嬉しかるべき。 (いてくれたなら、…嬉しいことでしょうに。)
16	3886	助詞	強調	連用形	逆接	牛尓己曽、鼻縄波久例。	牛にこそ、鼻縄はくれ。 (牛になら鼻縄をつけるものなのに。)
8	1576	助詞	強調	なし		君故尓許曽。	君故にこそ。 (あなたを思ってのことなのです。)
4	778	助詞	願望	なし		君乎見尓許曽。	君を見にこそ。 (あなたにお逢いしたいからなのです。)
7	1377	接辞	強調	なし		人目多見許曽。	人目多みこそ。 (人目が多いからです。)
11	2359	接辞	強調	なし		人目多社。	人目多みこそ。 (人目が多いからです。)
14	3574	接辞	強調	なし		宇良和可美許曽。	うら若みこそ。 (まだ若木でありすぎて。)
19	4161	接辞	強調	なし		常乎奈美許曽。	常をなみこそ。 (常というものがないからなのです。)

D　連用形に接続した「こそ」

巻	歌番号	接続	意味	結び	関係	用例	訓（訳）
12	2958	連用形	願望	終止形		不止見与、我戀将息。	止まず見えこそ、我が恋止まむ。 (いつも姿を見せてくれたら、私の恋心もおさまるでしょう。)
1	15	連用形	願望	なし		清明己曽。	さやけかりこそ。 (さわやかであってほしい。)
3	335	連用形	願望	なし		淵有乞。	淵にありこそ。 (淵であってほしい。)
4	615	連用形	願望	なし		夢所見乞。	夢に見えこそ。 (夢に見えてほしいものです。)
4	704	連用形	願望	なし		欲見社。	見まく欲りこそ。 (あなたの顔を見たいと思っているのです。)
5	807	連用形	願望	なし		都伎提美延許曽。	継ぎて見えこそ。 (絶えず見えて下さい。)
5	845	連用形	願望	なし		知良須阿利許曽。	散らずありこそ。 (散らずにいておくれ。)
5	852	連用形	願望	なし		左氣尓于可倍許曽。	酒に浮かべこそ。 (酒の上に浮かべて下さい。)
6	985	連用形	願望	なし		五百夜継許曽	五百夜継ぎこそ。 (五百日分の夜をつなぎあわせて下さい。)
6	995	連用形	願望	なし		遊飲與。	遊び飲みこそ。 (このように遊び飲んで下さい。)
7	1211	連用形	願望	なし		吾耳見乞。	吾に見えこそ。 (私に見せておくれ。)
7	1248	連用形	願望	なし		我告与。	我に告げこそ。 (私に告げておくれ。)
8	1498	連用形	願望	なし		往而告社。	行きて告げこそ。 (行って伝えておくれ。)
10	1928	連用形	願望	なし		開而所見社。	咲きて見えこそ。 (咲いて見せておくれ。)
10	1965	連用形	願望	なし		尓保比与。	匂ひこそ。 (鮮やかに色づいておくれ。)
10	2000	連用形	願望	なし		妹告与具。	妹に告げこそ。 (あの子に告げておくれ。)

10	2008	連用形	願望	なし		速告与。	早く告げこそ。 （早く知らせてほしい。）
10	2083	連用形	願望	なし		待登告許曽。	待つと告げこそ。 （お待ちしていると伝えておくれ。）
10	2129	連用形	願望	なし		於妹告社。	妹に告げこそ。 （あの子に告げておくれ。）
10	2249	連用形	願望	なし		於妹告社。	妹に告げこそ。 （あの子に告げておくれ。）
11	2501	連用形	願望	なし		夢所見与。	夢に見えこそ。 （夢に見えて下さい。）
11	2634	連用形	願望	なし		夢所見社。	夢に見えこそ。 （夢に見えて下さい。）
11	2661	連用形	願望	なし		打棄乞。	打棄てこそ。 （見捨てて下さい。）
11	2722	連用形	願望	なし		妹尓告乞。	妹に告げこそ。 （妻に伝えて下さい。）
11	2776	連用形	願望	なし		妹告乞。	妹に告げこそ。 （あの子に告げて下さい。）
12	2842	連用形	願望	なし		夢見与。	夢に見えこそ。 （夢に姿を見せて下さい。）
12	2850	連用形	願望	なし		相見与。	逢ふと見えこそ。 （目の前にいるかのように姿を見せておくれ。）
12	2957	連用形	願望	なし		夢尓所見乞。	夢に見えこそ。 （夢に現れておくれ。）
12	2959	連用形	願望	なし		嗣而所見与。	継ぎて見えこそ。 （続けて姿を現しておくれ。）
12	3024	連用形	願望	なし		有跡告乞。	ありと告げこそ。 （いると告げておくれ。）
12	3108	連用形	願望	なし		次而所見欲。	継ぎて見えこそ。 （夜ごと姿を見せてほしいものです。）
12	3120	連用形	願望	なし		夢所見欲。	夢に見えこそ。 （夢に見えて下さい。）
12	3142	連用形	願望	なし		吾尓所見社。	我に見えこそ。 （私に姿を見せて下さい。）
12	3154	連用形	願望	なし		早去欲。	早く行きこそ。 （早く行っておくれ。）
12	3155	連用形	願望	なし		靡有社。	靡きてありこそ。 （靡き伏せておくれ。）
13	3227	連用形	願望	なし		夢尓令見社。	夢に見えこそ。 （夢に見えて下さい。）
13	3254	連用形	願望	なし		真福在与具。	ま幸くありこそ。 （ご無事で行ってきて下さい。）
13	3280	連用形	願望	なし		相跡所見社。	逢ふと見えこそ。 （姿を見せて下さい。）
13	3281	連用形	願望	なし		相所見欲。	逢ふと見えこそ。 （姿を見せて下さい。）
13	3283	連用形	願望	なし		夢所見欲。	夢に見えこそ。 （夢に姿を見せて下さい。）
13	3284	連用形	願望	なし		無在乞常。	なくありこそ、と。 （起こらないでほしい、と。）
13	3288	連用形	願望	なし		無有乞常。	なくありこそ、と。 （起こらないでほしい、と。）
13	3292	連用形	願望	なし		有社等。	ありこそ、と。 （あってほしい、と。）
16	3866	連用形	願望	なし		早告許曽。	早く告げこそ。 （早く知らせておくれ。）
20	4363	連用形	願望	なし		伊母尓都氣許曽。	妹に告げこそ。 （あの子に伝えておくれ。）

20	4365	連用形	願望	なし		伊母尓都岐許曽。	妹に告ぎこそ。 (故郷のあの子に伝えておくれ。)
20	4408	連用形	願望	なし		伊弊尓都氣己曽。	家に告げこそ。 (家の者に伝えて下さい。)
20	4473	連用形	願望	なし		安里等都氣己曽。	ありと告げこそ。 (元気でいると伝えて下さい。)

E 連体形に接続した「こそ」

巻	歌番号	接続	意味	結び	関係	用例	訓（訳）
14	3509	連体形	強調	助詞		安路許曽要志母。	あろこそ良しも。 (あることだけは嬉しい。)

F 已然形に接続した「こそ」

巻	歌番号	接続	意味	結び	関係	用例	訓（訳）
1	50	已然形	強調	已然形		縁而有己曽、…浮倍流礼。	依りてあれこそ、…浮かべ流せれ。 (従っているからこそ、…浮かべ流しているのです。)
2	118	已然形	強調	已然形		戀礼許曽、…漬而奴礼計礼。	恋ふれこそ、…漬ちてぬれけれ。 (恋しく思って下さるので、…濡れてほどけたのですね。)
3	237	已然形	強調	已然形		詔許曽、志斐伊波奏。	詔らせこそ、志斐いは奏せ。 (おっしゃるからこそ、志斐めはお話し申し上げるのですよ。)
4	639	已然形	強調	已然形		如是戀礼許曽、…寐不所宿家礼。	かく恋ふれこそ、…寝ねらえずけれ。 (こんなにも恋しく思って下さるから、…寝られないのです。)
4	739	已然形	強調	已然形		念社、…至今日毛生有。	思へこそ、…今日までも生けれ。 (思っているから、…今日まで生きながらえているのです。)
7	1366	已然形	強調	已然形		意有社、波不立目。	心あれこそ、波立てざらめ。 (心があるからこそ、波を立てないのでしょう。)
12	2868	已然形	強調	已然形	逆接	思許増、…長欲為礼。	思へこそ、…長く欲りすれ。 (思っているからこそ、…長かれと願っていますのに。)
12	2922	已然形	強調	已然形	逆接	念許増、…悞有家礼。	思へこそ、…嬉しかりけれ。 (思うからこそ、…嬉しくてならなかったのに。)
13	3307	已然形	強調	已然形	逆接	然有社、…汝情待。	然れこそ、…汝が心待て。 (だからこそ、…あなたの心が向くのをまっていたのですが。)
13	3309	已然形	強調	已然形	逆接	念社、…汝心待。	思へこそ、…汝が心待て。 (思っているから、…あなたの心が向くのを待っていたのですが。)
16	3852	已然形	強調	已然形		死許曽、…山者枯為礼。	死ぬれこそ、…山は枯れすれ。 (死ぬからこそ、…山は枯れたりするのですね。)
17	3933	已然形	強調	已然形	逆接	於母倍許曽、…都藝都追和多礼。	思へこそ、継ぎつつ渡れ。 (思うからこそ、…繋ぎとめて日々を過ごしているのですが。)
17	3977	已然形	強調	已然形		孤悲家礼許曽婆、伊米尓見要家礼。	恋ひけれこそば、夢に見えけれ。 (思いを寄せて下さったからこそ、夢に見えたのですね。)
18	4088	已然形	強調	已然形		於毛倍許曽、…宇流波之美須礼。	思へこそ、…うるはしみすれ。 (思うからこそ、…親しませていただいているのです。)
19	4234	已然形	強調	已然形		千重尓積許曽、吾等立可氐祢。	千重に積めこそ、我が立ちかてね。 (幾重にも降り積もるから、私は腰をあげかねているのです。)
18	4111	已然形	強調	助詞		之可礼許曽、…名附家良之母。	然れこそ、…名付けけらしも。 (だからこそ、…名付けたようです。)
1	13	已然形	強調	連体形		然尓有許曽、…相挌良思吉。	然にあれこそ、…争ふらしき。 (そうであるあるからこそ、…争うもののようです。)
12	3216	已然形	強調	なし		飽不足社。	飽き足らねこそ。 (心残りですから。)
17	3978	已然形	強調	なし		敝奈里氐安礼許曽。	隔りてあれこそ。 (隔てていますので。)

註

1）大野晋著『日本語の文法【古典編】』（ 1988 年、角川書店）

2）著者不明『手爾葉大概抄』（1994 年根来司解説『手爾葉大概抄・手爾葉大概抄之抄』和泉書院）

『手爾葉大概抄』は、古来、藤原定家の著として飯尾宗祇の『手爾葉大概抄之抄』を添えて伝えられてきたようだが、鎌倉末期から室町初期の成立と見られ、著者不詳とされている。「手爾葉」は、現在の助詞、助動詞のほかに動詞の活用語尾、接尾語などを含み、分類は詳しくないが、作歌上の係り結びの法則や文末助詞の用法に主眼がある。

3）本居宣長著『てにをは紐鏡』（1970 年、大野晋編『本居宣長全集　第５巻』筑摩書房）

『てにをは紐鏡』は、係り結びの法則を一枚の表にしたものである。係りの要素を「は・も・徒（0 記号の意）」と「ぞ・の・や・何」と「こそ」の三つに分け、結びの形としてそれぞれ現在の終止形、連体形、已然形に相当する活用形を 43 段にわたってあげている。

また『詞玉緒』は、これを実例で説明したものである。

4）萩原広道著『弖爾乎波係辞弁』（1981 年、和泉書院）

『弖爾乎波係辞弁』は、本居宣長の『てにをは紐鏡』『詞玉緒』の中の数条を論評したものであり、係り結びの法則をより正確なものに近付けたものである。

5）山田孝雄著『日本文法論』（1908 年、宝文館）

6）森重敏著『日本文法の諸問題』（1971 年、笠間書院）

7）舩城俊太郎著『かかりむすび考』（2013 年、勉誠出版）

8）山田健三著「係り結び・再考」（2004 年、『国語国文』73-1）

9）谷千生著『言葉能組立　下』（1889 年、大八洲學會）

『言葉能組立　下』は、『詞乃久美立　上』とあわせて二巻からなり、上巻は言語の分類法、下巻は言語の組織法を説明している。下巻の組織法は、「備言」「整言」「変化言」の三つに分け、この「変化言」の中に係り結びの起源に触れた部分がある。「決定格」の用例として「舟が水に流さるるぞ」を挙げ、その「転置格」として「舟ぞ水に流さるる」と「舟が水にぞ流さるる」を挙げている。同様に「疑問格」の用例として「舟が水に流さるるか」を挙げ、その「転置格」として「舟か水に流さるる」と「舟が水にか流さるる」を挙げ、さらに「疑問第二格」の用例として「舟が水に流さるや」を挙げ、その「転置格」として「舟や水に流さるる」と「舟が水にや流さるる」を挙げている。しかし、「なん」「こそ」については、「転置格」の用例として「舟なん流るる」「舟こそ流るれ」を挙げるのみで、元の格を示してはいない。

10）金澤庄三郎著『日本文法論』（1903 年、金港堂）

11）石田春昭著「コソケレの本義」（1939 年、『国語と国文学』2-3）

12）大野晋著『係結びの研究』（1993 年、岩波書店）

13）阪倉篤義著『語構成の研究』（1966 年、角川書店）

14）吉田金彦著『上代語助動詞の史的研究』（1973 年、明治書院）

15）山口佳紀著『古代日本語の成立の研究』（1985 年、有精堂出版）

16）水島義治著『萬葉集　全注　巻第 14』（1986 年、有斐閣）

17）鴻巣盛廣著『萬葉集　全釋　第４冊』（1943 年、大倉廣文堂）

18）佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著『萬葉集　本文篇』（1963 年、塙書房）

19）佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著『萬葉集　訳文篇』（1972 年、塙書房）

20）伊藤博著『萬葉集　釋注　一～十』（1995 ～ 1998 年、集英社）